



一 おしっこ王子の登場

「ごちそうさま」

僕は朝ごはんを食べ終わると、手を合わせ、席を立つ。

「もう、学校へ行くの？」

「うん。行くよ」

「忘れ物はないの。ハンカチに、ティッシュは持った？」

ママの声が僕の背中を通過する。

「大丈夫だよ。昨日から、ちゃんとチェックしているよ」

僕はズボンの右ポケットにハンカチを、左ポケットにティッシュを確認した。そして、ランドセルを背負うと、「じゃあ、行ってきます」とパパとママに声を掛け、リビングルームをでた。靴を履いて、玄関のドアを開ける。急に、おしっこに行きたくなった。やっぱり忘れ物があった。僕は靴を脱ぎ捨て、トイレに駆け込んだ。

ジョー、ジョー、ジョー、ジョー、ジョボ、ジョボ、ジョボ、ジョボ、チョン。ああ、気持ちよかった。僕はおちんちんをパンツにしまい、タンクのレバーを回そうとした。その時だ。

ジャジャジャジャーン。

たまり水に小さな人形が現れた。おしっこ王子だ。久しぶりに会った。僕は親しみをこめて声を掛けた。

「どうだい、僕の体の調子は。おしっこ王子」

「そうだな。色は黄色だし、量も適当だから、ちょうどいいんじゃないか」

おしっこ王子はまるで僕のかかりつけ医のように診断した。でも、さすがに白衣は着ていない。体は黄色だ。

「じゃあ、流すよ」僕は学校に遅れては困るので、おしっこ王子との会話を切り上げて、タンクのレバーを回そうとした。

「ちょっと待った」

おしっこ王子が水の中から大きな声を出した。

「どうしたんだい。僕の体に異常でもあるのかい」

「いや。君の体は健康だよ。特に異常はないよ」

「じゃあ、流すよ」

僕は学校に遅れないかと心配になった。それでも、おしっこ王子の話が続く。

「ちょっと待ってくれ」

「何を待つのか」

おしっこ王子は腕を組んで目をつぶっている。急いでいるんだけどなあ。僕は心の中で思ったけれど、口には出さなかった。おしっこ王子は、目を開くとおもむろにしゃべり始めた。

「僕はこれまで、君の体の中で、君の成長のために、いろいろと働いてきた」

「うん。それはわかっている。君のお父さんのうんこ大王と一緒に、僕の成長のために、食べ物

から栄養素を吸収してくれているんだろ」

「そうだよ」

「君たちには大変感謝しているよ」

僕は早く話を終わらせかけたので、早口でしゃべる。それでも、おしっこ王子の話が続く。

「確かに、僕やうんこ大王は君を体の中から守っている。だけど、それでは十分じゃないんだ」

「十分じゃないって？」

「だってそうだよ。お腹の中に入ってきた食べ物を消化して、栄養素は吸収し、いらぬものは排出しているけれど、それじゃあ遅いんだ」

「何が遅いの？」

「君の口に入る前に、その食べ物が安心・安全かどうか確かめないとイケないし、ゆっくりと噛みしめて食べるよう、食べ方も指導しなくちゃイケない。それに、君が住んでいる世界は、車や多くの人があるだろうの。それらからも、君を守らないとイケないんだ」

「それはわかるけれど。でも、どうやって僕を守るの？」

「いい考えがあるんだ」

おしっこ王子はザザザザザザーと水中から飛び上がると、僕の胸ポケットの中に飛び込んだ。

「ええ！」僕は驚いた。濡れるじゃないか。それにおしっこの臭いがするんじゃないのか。ばっちい。でも、自分のおしっこだ。自分のおしっこをばっちいと思うことは、僕自身もばっちいということになる。ここは、ガマン、ガマン。

僕の驚く顔を見て、おしっこ王子は

「まさか、ばっちいと思っているんじゃないだろうね」

と、顔のすぐ横でにらみつける。

「まさか。おしっこ王子と僕は一心同体だよ。ばっちいだなんてとんでもないよ」

僕は表面上、笑顔で首を振るものの、自分の考えがおしっこ王子に当てられたので、心の中で舌を出す。

「君の心配は無用だよ。表面張力のおかげで、君のポケットは濡れることないし、臭いも拡散することはないよ。僕の体の中に閉じ込めているんだ」

僕はおしっこ王子に気付かれないように鼻の穴をふくらましたり、すぼめたりする。クンクン。確かに臭くもないし、胸ポケットは濡れていない。これなら、おしっこ王子が言うように大丈夫だ。

「わかったよ。じゃあ、学校に行こう」

あれこれ考えていると学校に遅れてしまう。なんとかなるだろう。僕はおしっこ王子と一緒に玄関を出た。

その頃、お腹の中では、

「隊長。朝食の栄養は全部、吸収しました」と、リキッド班の隊員が報告する。

「ご苦労」仕事が完了したにも関わらず、隊長は浮かない顔だ。

「隊長、どうかしたんですか。何か心配ごとでもあるんですか」

副隊長が隊長の側にやってきた。

「うん。王子がさっきからいないんだよ」

「王子がいないって、どこかへ行ったんですか」

「わからない。お腹の中を全て探したんだけど、いないんだ。大王には仕事が完了したことを報告しないとイケないんだが。どうしたものかなあ」

隊長は腕組をしたままだ。

「おい。王子を知らないか」

副隊長が隊員に尋ねた。

「王子なら、さっき、お腹から出て行かれましたけど」

「出て行った？出て行ったって、どこへ？」

「ちょっと、主人に会いに行くとおっしゃってました」

「そうか。出ていったか。仕方がないな」

隊長はその話を聞くと、

「わかった。今から大王に仕事が完了したこと報告するよ」

「王子がいなくなったことは？」

「言わないわけにはいかないだろう」

隊長はゴーヤとにが瓜を同時にかぶりついたような顔をして大王の所に向かった。